HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	札幌農学校・東北帝国大学農科大学の演習林に関する一考察
Author(s)	佐々木, 朝子
Citation	北海道大学大学文書館年報, 14, 79-97
Issue Date	2019-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73821
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARHUA_14_4.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

＜ 研究ノート ＞

札幌農学校・東北帝国大学農科大学の演習林に関する一考察

佐々木　朝子

はじめに

近代日本において、高等農林学校や農学部を備えた帝国大学は、主に林学に関する研究や学生の実習などを名目として「演習林」を設置していた。ただし、まとまった面積の土地の入手や林業経営による収益が見込めることから、財産林や林業の現業機関として大学財政に寄与することも求められる場合があり、演習林の性格は研究・教育にとどまらない。演習林の有りようは、帝国大学や高等農林学校を前身校にもつ大学における研究・教育はもちろん、林業経営を通じた地域との関わりや大学財政、国の土地政策との関わりなど、大学史上の多くの課題に繋がるであろう。

北海道大学（以下、「北大」と略す）は、1876年に開校した札幌農学校を前身とする。札幌農学校は、1907年９月に東北帝国大学農科大学、1918年４月には北海道帝国大学となり、戦後は1949年に新制大学として北海道大学に、2004年に国立大学法人北海道大学となって、現在に至っている。

北大の演習林は、札幌農学校が1901年に「第一基本林」を取得したのを嚆矢として、表１に示す通り、次々と設置された。

表１　北大の基本林及び演習林の設置年

時期	設置年	名称	設置地域
札幌農学校	1901年	第一基本林	北海道
	1902年	第二基本林	北海道
	1904年	演習林	北海道
東北帝国大学農科大学	1912年	トイカンベツ演習林	北海道
	1913年	樺太演習林	樺太
	1913年	朝鮮演習林	朝鮮
	1916年	台湾演習林	台湾
北海道帝国大学	1925年	和歌山演習林	和歌山県
北海道大学	1956年	桧山演習林	北海道

出典　『北大百年史』通説（1982年）所載の年表より作成。

演習林は、札幌農学校期に３カ所、東北帝国大学農科大学期に４カ所、北海道帝国大学期に１カ所、新制大学となってからは１カ所が設置された。演習林の設置が、札幌農学校と東北帝国大学農科大学の時期、1900～1910年代に集中していることがわかる。このうち、樺太・朝鮮・台湾演習林は1945年に接収され廃止となった。

北大の演習林については、北海道大学演習林発行『北海道大学演習林60年の歩み』（1963年）が、1963年までの状況を「森林管理」「施業計画」など項目別に整理している[1)]。また、関係する先行研究には、大学財政との関連に注目したものが多い。たとえば、小鹿勝利「演習林」（『北大百年史』通説、1982年、801–815ページ）は、北大演習林の沿革を概観するなかで財政的機能の解明に筆を割くほか、秋林幸男・門松昌彦・夏目俊二・湊克之・高畠守・高橋廣行「札幌農学校の基本林と演習林の創設」（『北海道大学農学部演習林研究報告』第56巻第１号、1999年２月）や、秋林幸男・門松昌彦・湊克之・西本肇「札幌農学校の総合大学化と維持資金　――北大理学部の創設と雨龍演習林を中心に――」（『北海道大学農学部演習林研究報告』第54巻第２号、1997年９月）は、北大演習林が大学の維持資金として果たした機能を論じている[2)]。

これまで明らかにされてきた財政的機能に加えて、管理体制や、研究・教育体制も合わせて、演習林の実態を総合的に分析する必要がある。そこで本稿では、その準備段階として、1900～1910年代、札幌農学校・東北帝国大学農科大学期における概況及び職員配置の整理を行うこととする。

１．札幌農学校及び東北帝国大学農科大学における演習林の概況

札幌農学校・東北帝国大学農科大学期の各演習林の概況や管理・利用状況を示す資料に、『東北帝国大学農科大学農場演習林植物園一覧』がある。この資料は、東北帝国大学農科大学の農場・演習林・植物園の沿革略、各種統計、各種規程を一覧にした印刷物であり、稿者は1909年発行分を除き、1908年から1918年にかけて各年の発行分を確認している[3)]。また、『北海道帝国大学農科大学農場演習林植物園一覧』（1919年）所載の「本大学所属農場演習林植物園之沿革略」により、東北帝国大学農科大学期までの沿革を通覧することができる[4)]。

以下の表２～表８は、『農場演習林植物園一覧』所載の「北海道帝国大学農科大学農場演習林植物園之沿革略」及び「演習林大要」を参照し、各演習林の概況を整理したものである[5)]。なお、「地積」欄、「施設」欄については、土地・建物・工作物の変遷を収載している「北海道大学所属国有財産沿革　雨龍演習林．苫小牧演習林．天塩第一演習林　十二冊の内其七」・「北海道大学所属国有財産沿革　天塩第二演習林．和歌山演習林．桧山演習林．海岸林造成試験地　十二冊の内其八」・「北海道大学所属国有財産沿革　朝鮮．樺太．台湾．各演習林．第七農場．附属地　十二冊の内其十二」（北海道大学大学文書館蔵、以下、「国有財産沿革」と略す）により補足した。

表 2　第一基本林（雨龍演習林）の概況

名称の変遷	1907年 9 月　東北帝国大学農科大学設置に伴い「雨龍演習林」に改称
設置	1901年 3 月
所在	北海道雨龍郡深川村
地積	1901年 3 月　約29,754ha（ 3 万町歩）所管換により設置
林相	針葉樹純林・広葉樹純林・針広混淆林（アカエゾマツ、エゾマツ、トドマツ、ミズナラ、ヤチダモ、ハリギリ、シナノキ、シラカンバなど）
施設	1909年　　看守所竣工（林内第一号植民地内）
備考	1913年度　　吏員 1 名在勤開始

表 3　第二基本林（天塩演習林・天塩第一演習林）の概況

名称の変遷	1907年 9 月　東北帝国大学農科大学設置に伴い「天塩演習林」に改称 1914年 6 月　「天塩第一演習林」に改称
設置	1902年 1 月
所在	北海道中川郡中川村
地積	1902年 1 月　約19,836ha（ 2 万町歩）所管換により設置 1913年11月　約139ha（140町 6 反 2 畝29歩733）鉄道院に売却 1914年 7 月　約0.2ha（ 1 反 5 畝 9 歩736）鉄道院に売却 1918年 3 月　約140ha（140町 8 反 1 畝13歩）鉄道院に売却
林相	針葉樹純林・広葉樹純林・針広混淆林（アカエゾマツ、エゾマツ、トドマツ、ヤチダモ、ミズナラ、ハリギリ、カツラ、シナノキ、キハダ、ホホノキなど）
施設	1911年　　派出所竣工（字咲来） 1915年 4 月　板橋（上ノ橋・中ノ橋・下ノ橋）新設 1915年10月　派出所移築・生徒宿泊所竣工（上音威子府）
備考	1912年　　この年までに助手・嘱託員の在勤開始（字咲来）

表 4　演習林（苫小牧演習林）の概況

名称の変遷	1907年 9 月　東北帝国大学農科大学設置に伴い「苫小牧演習林」に改称
設置	1904年 1 月
所在	北海道勇払郡苫小牧村
地積	1904年 1 月　約2,228ha（675万坪）所管換により設置 1907年10月　約17ha（52,287坪）苗圃として編入（勇払郡オテーネ） 1917年 7 月　約 7 ha（ 6 町 5 反 5 畝23歩、演習林続地）所管換により編入
林相	広葉樹純林・針広混淆林(エゾマツ、ミズナラ、コナラ、イタヤカエデ、ハリギリ、シナノキ、ホホノキ、ヤチダモ、ハルニレ、キハダ、アサダなど)
施設	1909年11月　派出所・生徒宿泊所竣工 1911年11月　派出所竣工
備考	1912年　　この年までに助手・嘱託員の在勤開始（字オテーネー）

表５　トイカンベツ演習林（天塩第二演習林）の概況

名称の変遷	1914年６月　「天塩第二演習林」に改称
設置	1912年８月
所在	北海道天塩郡幌延村字トイカンベツ
地積	1912年８月　約22,511ha（6,821万6,038坪）所管換により設置
林相	針葉樹純林・針広混淆林（アカエゾマツ、エゾマツ、トドマツ、ミズナラ、ヤチダモ、ハリギリ、シラカンバ、イタヤカエデなど）
施設	1914年７月　派出所設置（幌延村字トイカンベツ川口、借り上げ庁舎）
備考	1914年　　助手１名在勤開始

備考：「設置」年月について、『農場演習林植物園一覧』所載の沿革略は、「所管換ノ上演習林ニ編入」した日付を「大正二年一月十五日」とする。ただし、前掲「国有財産沿革」には、国有林を東北帝国大学農科大学の基本林として文部省用地に編入したとの1912年８月31日付の通知が掲載されている。

表６　樺太演習林の概況

名称の変遷	改称なし
設置	1913年６月
所在	樺太西海岸久春内支庁管内珍内川左岸
地積	1913年６月　約19,701ha（5,970万坪）所管換により設置
林相	針葉樹・広葉樹（低地：カラマツ、ヤナギ類、ハンノキ類　山麓山腹：トドマツ、エゾマツ　高地：シラカンバ、エゾノタケカンバ　山頂：ハイマツ）
施設	1914年９月　派出所設置（萌菱、借り上げ庁舎）
備考	1914年　　吏員１名在勤開始

表７　朝鮮演習林の概況

名称の変遷	改称なし
設置	1913年９月
所在	朝鮮全羅北道茂朱郡及び長水郡
地積	1913年９月　約25,623ha（7,764万6,000坪）無償貸渡
林相	広葉樹・針葉樹（ミズナラ、コナラ、アカマツ、チョウセンモミ、イチイ、トウヒシラベなど。山腹以上：成林地　山腹以下：稚樹発生地　山麓：無立木地）
施設	1914年４月　派出所設置（茂朱郡茂朱面、借り上げ庁舎） 1918年　　庁舎新築
備考	1914年　　助手１名在勤開始

表 8　台湾演習林の概況

名称の変遷	改称なし
設置	1916年 8 月
所在	台湾南投庁埔里社支庁管内守城大山及び東眼山北面
地積	1916年 8 月　約6,778ha（2,053万8,000坪）仮保管転換により設置
林相	常緑広葉樹・針葉樹（イチイカシ、アラカシ、シイ、クリガシ、タブ類、オガタマノキ、シャクナゲ、マツ、ヒノキ、ベニヒ、ショウナンボクなど）
施設	1917年　　派出所設置（埔里社、借り上げ庁舎）
備考	1917年　　吏員 1 名在勤開始

各林の所在地は、以下の図 1 から図 4 の通りである。

表 1 から表 8 に基づくと、札幌農学校・東北帝国大学農科大学期の各林は、以下のような状態にあった。1901年の設置当初、各林の名称は、「基本林」と「演習林」の二種類であった。『北大百年史』通説は、札幌農学校は「財政上の理由」で北海道庁の所轄する森林の譲渡方を申し出て、1901年に雨龍郡深川村に「第一基本林」を、1902年に中川郡中川村に「第二基本林」を得、後の1903年に仮引渡を受けて「生徒の林学実習地」として勇払郡苫小牧村に「演習林」を設置したと、設置目的を述べている[6)]。札幌農学校が1907年に東北帝国大学農科大学に昇格した際には全林の名称が「演習林」に統一され、「第一基本林」を「雨龍演習林」、「第二基本林」を「天塩演習林」、「演習林」を「苫小牧演習林」と、所在地名を付して改称した。さらに、1914年、「天塩演習林」を「天塩第一演習林」に、「天塩演習林」に接続する「トイカンベツ演習林」を「天塩第二演習林」と改称した。

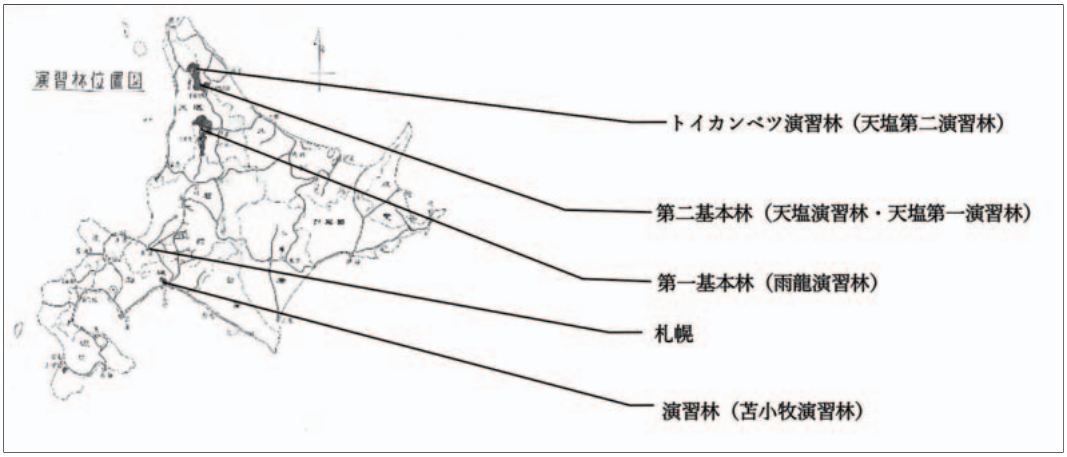

図 1　北海道内における北大の演習林の配置

北海道大学演習林発行『北海道大学演習林60年の歩み』（1963年）より抜粋。林名等は稿者による付加。

各林の地積は、苫小牧演習林の約2,000ha 台湾演習林の約7,000ha を例外として、ほと

図２　樺太演習林位置図

北海道帝国大学農学部附属演習林発行『北海道帝国大学農学部附属樺太演習林概要』（1933年３月）より転載

図３　朝鮮演習林位置図

北海道帝国大学農学部附属演習林発行『北海道帝国大学農学部附属朝鮮演習林概要』（1927年８月）より転載

図４　台湾演習林位置図

北海道帝国大学農学部附属演習林発行『北海道帝国大学農学部附属台湾演習林概要』（1931年６月）より転載

んどの演習林が20,000ha 前後以上であり、広大な土地が演習林に設定されていたことがわかる。また、道内に所在するとはいっても、第一基本林、第二基本林、トイカンベツ演習林は、図１の通り北海道の北部に位置し、大学が所在する札幌からは遠く離れている。どのように管理するのか、人員の配置に課題があったことが推察される。

建物の建設は、雨龍演習林の「看守所」と苫小牧演習林の「派出所」、「生徒宿泊所」が1909年に竣工したのが最初期である。苫小牧演習林では、1912年までには「助手」が在勤していた。他演習林と比べて、いち早く整備が進んだと言える。

1912年以前から嘱託や助手が在勤していた天塩演習林、苫小牧演習林に加えて、1913年には雨龍演習林に、1914年には天塩第二演習林、朝鮮演習林に、1917年には台湾演習林に、助手や「吏員」が在勤をはじめた。『東北帝国大学農科大学一覧　自大正六年至大正七年』所載の「職員」欄によると、各演習林の担当職員には、雨龍演習林では助手に竹山賢一、書記に小畑善三が、天塩第一演習林では助手に小野崎浩三が、苫小牧演習林では助手に谷本勇造が、天塩第二演習林では助手に成田則淑が、朝鮮演習林では助手に岩崎直人が、台湾演習林では嘱託に籠田又平が挙げられる。各演習林で在勤していたのは、彼らであったと考えられる。なお、樺太演習林の担当職員名は『一覧』に記載が見られない。

2．教職員の配置

『札幌農学校一覧』及び『東北帝国大学農科大学一覧』（以下、両者を『一覧』と略す）は、札幌農学校及び東北帝国大学農科大学が年に一度発行していた概要であり、「職員」欄には、教職員の氏名や学位などが記載されている。『札幌農学校一覧　自明治三十五年至明治三十六年』（1902年発行）からは、「職員」欄に「第一基本林」「第二基本林」の項目があらわれ、担当する教職員の氏名・職名が明らかになる。そこで、各年の『一覧』ごとに、「職員」欄に掲載された演習林を担当する教職員について、付表「札幌農学校及び東北帝国大学農科大学演習林担当教職員一覧」として整理した。

対象とした1900～1910年代における演習林担当の教職員の総人員数は、1914年から急激に増加したことが付表からうかがえる。札幌農学校期には、教授１名、「嘱託監督」１名、「事業手」１名、各林の「看守」、という体制で執務していた。東北帝国大学農科大学期に入っても、1913年までは、「演習林長」１名、「助手」もしくは付設学科の「助教授」１名、「嘱託」もしくは「書記」１名、「嘱託」１名、という札幌農学校期と大きくは変わらない体制が続くものの、1914年からは助手３名が増加（うち一人は前年度の嘱託員）、1915年にはさらに助教授１名、助手１名、嘱託２名が、1916年には嘱託１名が、1917年には助手２名及び書記（雨龍演習林在勤）１名が増加する。

以上のような大まかな傾向を踏まえたうえで、以下に主要な役職と担当教職員について、解説を加える。

2－1．基本林長・演習林長

札幌農学校の基本林・演習林では、第一基本林、第二基本林におのおの「基本林長」を、演習林に「演習林長」を置き、事務は「農事部」が取り扱った[7)]。農事部は、1895年に設置され、「農場ノ管理ニ関スル事項」や、農場で生産される「生産及製造物品ニ関スル事項」、農場で行われる「農事実験ニ関スル事項」、農場で実地の研修を行う「現業生ニ関スル事項」など、主に農場に関わる事務を分掌していた[8)]事務組織である。札幌農学校は「第一農場」から「第八農場」までの農場を、北11条や平岸村といった農学校近郊のほか、夕張、富良野など道内各地に所有しており、それら８ヵ所の農場の事務を担っていたのが農事部であった。基本林や演習林は、1902年から農事部の所管に入った[9)]。

1902年から1904年にかけて、第一基本林長・第二基本林長・演習林長は、新島善直が務めていた[10)]。新島は、「森林科」の主任教授であった。森林科は1899年に設置された、修業年限３年の、「中学校三学年ヲ修業シタル者」または「同等程度ノ入学試験ニ及第シタル者」に林業に関する中等程度教育を行う付設の実業教育課程であった[11)]。1901年には校則を一部改正し、入学資格が中学校卒業程度に高められた[12)]。新島は、札幌農学校の森林科開設のため、1899年５月に着任した[13)]教授で、帝国大学農科大学（後の東京帝国大学農科大学）を1896年に卒業した林学士であった。

次に、第一基本林長・第二基本林長・演習林長を務めたのは宍戸乙熊である。宍戸は東京帝国大学を1902年に卒業した林学士[14]で、1903年に札幌農学校教授に着任した。また、宍戸は「林学科」の主任教授であった。「林学科」は、1905年に「森林科」を改称した付設の実業教育課程で、修業年限を３年とし、入学資格を中学校卒業程度としていた。卒業生には「林学得業士」の称号が授与された。

宍戸の前に基本林長・演習林長を務めていた新島は、1905年から1907年にかけてドイツに留学した。当時の札幌農学校で林学を専門とする教授は、新島と宍戸の２名のみであった[15]ため、宍戸が基本林長・演習林長の任を引き継いだと考えられる。

２－２．演習林長

札幌農学校の東北帝国大学農科大学への昇格に伴い、1907年９月、農事部が各農場とともに第一基本林、第二基本林、演習林を所管する体制は、各林を統括する「演習林長」を置き、学長の監督のもとで演習林長が「雨龍演習林」「天塩演習林」「苫小牧演習林」の管理を執り行う体制となった[16]。

1907年から1908年の「演習林長」は宍戸乙熊である。宍戸は札幌農学校で各林の林長を一手に引き受けていたため、事実上、札幌農学校期の体制が引き継がれたといえよう。

1909年から1926年までの演習林長は小出房吉である。小出は、1894年に帝国大学農科大学を卒業し、1900年に林学博士を取得した[17]。1903年から1907年にかけて盛岡高等農林学校で教授を務めたのち、1907年10月に、付設の実業教育課程である林学科の教授として東北帝国大学農科大学に着任した。着任後は、1909年４月に「大学林学科開設準備委員長」の発令を受けるなど、本科の学科として「林学科」を設置するための準備を行った。

本科の林学科は、1907年６月、文部省令第21号により設置が公布され、1910年９月より授業を開始することとなった。1909年５月には勅令第143号により「林学第一講座」が、1910年３月には勅令第68号により「林学第二講座」が開設され、1910年９月より実際に授業を開始した[18]。林学第一講座教授となった小出や、林学第二講座教授となった新島善直らのもと、東北帝国大学農科大学は「林学士」を送り出した。また、本科の林学科の授業開始に伴い、既存の付設の林学科を「林学実科」と改称した[19]。

林学第一講座担任のほか、小出は1926年10月に死亡する直前の９月まで林学実科主任を兼ねており、本科・付設の実業教育課程にわたって、東北帝国大学農科大学における林学教育の中心を担っていた。新島、宍戸、小出と、札幌農学校から東北帝国大学農科大学にかけての基本林・演習林の責任者は、主任や筆頭教授を務めた教員が担っていた。

２－３．書記

「書記」は「文部省直轄諸学校官制」（1893年８月勅令第86号）に「上官ノ命ヲ承ケ庶務会計ニ従事ス」[20]と規定されており、庶務・会計事務を担当した。『一覧』では、演習林を担当する書記は1910年11月現在の「職員」欄[21]に記載があり、柴田春造がその任にあたっ

ていた。1910年当時、「東北帝国大学農科大学官制」では書記の人数を11名と定めており[22]、『一覧』の「職員」欄では、助手との兼任１名・予科助教授との兼任２名・専任10名の計13名が確認できる[23]。柴田は専任の一人であった。

柴田は、『札幌農学校一覧　自明治三十九年至明治四十年』所載の「職員」欄（1907年１月現在）には、「農事部」担当の「農場監督補助嘱託」として記載がある。札幌農学校の農場や演習林の事務を担っていた農事部は、「東北帝国大学農科大学官制」（1907年６月勅令第237号）では置かれなかった。直後の1907年10月現在の現員を示した『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十年至明治四十一年』（1907年発行）の「職員」欄によると、演習林の職員には嘱託が１名増加し、柴田が着任している。柴田は、同時に農場や植物園でも嘱託を兼任した。そして、1910年11月現在「職員」欄で、柴田は初めて「書記」と記載されている。その後、1913年１月に死亡する[24]まで、農場、演習林、植物園の書記の兼任を続けた。柴田の後に演習林の書記となった鴨沢恒義も、農場と植物園の書記を兼任している。

柴田が当初勤務していた農事部が、農場の他に演習林の事務を所管していたことを考え合わせると、演習林を担当する書記が農場や植物園の書記を兼任しているのは、農事部の職掌を受け継いだものと考えられる。

２－４．官制外の職員

基本林・演習林設置以後の札幌農学校では「文部省直轄諸学校官制」（1893年８月勅令第86号）、東北帝国大学農科大学では「東北帝国大学農科大学官制」（1907年６月勅令第237号）に定められた職員が正規の職員であるが、基本林や演習林で勤務していた「官制」外の職員には、「事業手」「雇」「看守」がいた。『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十三年至明治四十四年』の「職員」欄（1910年11月現員）までは、『一覧』の「職員」欄に「官制」外の職員も掲載されており、勤務者が判明する。

⑴　事業手・雇

「事業手」は、1902年から1907年まで小島蔵之丞（1865年生まれ）が務めた[25]。1902年３月に雇用された小島は、天塩に同年１月に設置されたばかりの「第二基本林」在勤を命じられている。小島は、宮城大林区署内にて1895年から1897年にかけて森林看守を、また1897年から1898年までは営林主事補を務めており、1902年に札幌農学校の事業手となる以前に、森林管理の業務経歴があった。1907年２月には事業手から「雇」に切り替えられ、同年９月１日付で農科大学在勤を命じられている。さらに1908年３月に「助手」に任じられたが、９月に休職した。

演習林で二人目の事業手は小畑善三である。小畑は、『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十一年至明治四十二年』所載の「職員」欄（1908年11月現員）から、「職員」欄に「官制」外の職員が記載されなくなる直前の『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十三

年至明治四十四年』所載「職員」欄（1910年11月現員）まで、事業手として記載がある。ただし、「退職者履歴資料三、１、大正元～３」（北海道大学大学文書館蔵）によると、小畑は1915年８月に雇を退職している[26]。1910年から1915年の間に、事業手から雇への切り替えがあったと推察される。

⑵　看守

各林には、「看守」が置かれる場合もあった。札幌農学校の演習林（1907年９月「苫小牧演習林」に改称）には、1904年から看守が置かれた。1904年４月から1911年まで、演習林及び苫小牧演習林の看守を務めたのは、長岡浅吉である[27]。長岡は演習林が所在する苫小牧村の住民で、採用当時は村の総代であった。苫小牧演習林内に建物が建築されたのは、1909年の派出所と生徒宿泊所が最初である。少なくとも長岡が看守に着任した当初は、林内に詰めていなかったと考えられる。

また、第一基本林（1907年９月「雨龍演習林」に改称）には、1905年から看守が置かれた。第一基本林・雨龍演習林の看守は、1905年９月から1909年９月までは大津蔀[28]が、1909年以降は北村袈四郎が務めた。

大津は、1889年に奈良県吉野郡十津川村から北海道新十津川村に移住した。北海道への移住前は、十津川村組合議員などを務めていた。「退職者履歴資料二、４、明治42」（北海道大学大学文書館蔵）所載の履歴書によると、親戚の縁で1898年に幌加内に移転したとある。後述の「復命書」にも、大津について「（幌加内）」と記載があることから、幌加内に居住していたと考えられる。

雨龍演習林では、1909年に林内に看守所を建設し、看守を常駐させることとなった。看守所の建設場所と看守候補者選定のため、現地調査を行った事業手の小畑善三が演習林長の小出房吉に提出した、1909年５月29日付「雨龍演習林看守所位置及看守ニ付調査方復命書」[29]（以下、「復命書」と略す）が残っている。「復命書」から判明する、雨龍演習林の次の看守を北村とする選考課程は、次のようである。

調査時点での看守候補者は、大津蔀、井尻久吉、北村袈四郎の三名であった。大津は以前から看守を務めていたが、林内の看守所への転居が難しいことを理由に、就任を希望しなかった[30]。井尻・北村は両者ともに「大ニ希望」していた。井尻は所有する19戸分の土地の一部を貸し付けながら農業を営んでおり、北村は農業の傍ら冬期は「小川伐木所ノ山頭」を務めていた。北村には同郷人「吉田郵便局長」や前看守の大津の推薦があった。

「復命書」の報告内容は多岐にわたる。たとえば、長男と同居予定の北村について、「本人ハ文字ヲ知ラザレドモ長男義明帰宅セバ少シモ不自由ナク」、長男は「馬ヲ馭スル事装蹄スル事等ヲ修業セル由ナレバ農業ニハ適当ナルベシ」と報告されている。看守には、営農する技術に加えて、識字能力が求められていたことがわかる。

2－5．嘱託

「嘱託」は、1902年から置かれた。1902年から1907年にかけて勤務していたのは斎藤米蔵（1860年生まれ）である。斎藤は、1902年２月から、札幌農学校の第一基本林及び第二基本林の「監督」を嘱託されていた[31]。1903年からはドイツ語の教員も嘱託されている。1907年11月に林学科助教授に昇任した直後、同年12月に清国からの招聘に応じて出国し、1909年１月付で廃官となった。

斎藤は、1873年から1874年にかけて、私立春風社、私立壬申義塾、東京外国語学校でドイツ語を学び、1874年に大学医学校予科に進学したが、1879年に病により除籍となった。その後の経歴では、1882年から1889年にかけて静岡・宮崎・鹿児島の各大林区署に勤務したほか、1889年から1901年には宮内省へ出向し、その間、北海道御料林を管理していた御料局札幌支庁[32]で、増毛出張所長兼留萌苫前宗谷出張所長、上川出張所長兼天塩出張所長を務めるなど、官林の経営業務に長く携わっている。

斎藤が清国に招聘された1907年以降、1910年ごろに書記に切り替えとなった柴田春造を除くと、本科の林学科の授業が開始される前年の1909年を境に、1913年までは毎年嘱託１名が配置されている。1909年から1913年にかけて嘱託となったのは、1909年には林学得業士の岩崎直人（1909年東北帝国大学農科大学林学科卒業）、1910年には林学得業士の谷村進（1910年東北帝国大学農科大学林学科卒業）、1911年には農学士の森岡勇（1910年東北帝国大学農科大学卒業）、1912～1913年には林学得業士の小野崎浩三（1910年東北帝国大学農科大学林学科卒業）である。彼らは全員が東北帝国大学農科大学出身者で、卒業後まもなく着任した。また、森岡を除いた３人（岩崎、谷村、小野崎）は、付設の林学科を卒業した林学得業士であった。

1914年には、『一覧』「職員」欄では嘱託の職員の記載はない。この年は、次項「助教授・助手」で説明するように、助手が急激に増加した年であった。1915年には新たに林学得業士の成田則淑（1914年東北帝国大学農科大学林学実科卒業）、米屋広吉（1915年東北帝国大学農科大学林学実科卒業）が嘱託となった。1916年には、さらに林学士の石尾和作（1916年東北帝国大学農科大学卒業）が嘱託として加わっている。

2－6．助教授・助手

1907年12月に清国へ出国した嘱託の斎藤米蔵と交代するように、板垣豊が1908年２月に演習林担当の助教授に着任した[33]。板垣は、付設実業教育機関である林学科の助教授であった。付設課程の助教授は、本科の助手に相当する。以下、助手と併せて記述する。

板垣は、1895年に宮城大林区署の営林主事となるが、1895年９月から1896年５月まで、また1897年１月から12月までの二度、出征により非職となった。さらに、1900年に休職して札幌農学校森林科に入学、1903年に卒業した。同年に北海道庁植民部に勤務し、1904年から1906年にかけて再び出征し、山林局勤務を経て、1908年２月、東北帝国大学農科大学林学科助教授に着任した。その後、1910年９月に清国の招聘に応じて農科大学を離れ、1912

年に廃官となった。断続的ながら、森林管理の実務経験者といえよう。

板垣は、演習林の担当教員に配置された最初の札幌農学校の卒業生でもあった。板垣が農科大学を離れた1910年、演習林には農科大学の「助手」が配置され、林学得業士の谷本勇造（1908年東北帝国大学農科大学林学科卒業）が着任した。1914年には、助手の人数は４人に増加した。谷本に加え、1909年に嘱託であった岩崎直人、1912～1913年に嘱託であった小野崎浩三、また林学得業士の勝野正雄（1913年東北帝国大学農科大学林学実科卒業）が助手となった。また、1915年には助手にも林学士が配置された。1914年に東北帝国大学農科大学を卒業し、林学士を得た佐藤義夫である。

1915年には、本科の助教授が演習林担任の教員に加わった。本科の林学科の一期生、中島広吉（林学士、1913年東北帝国大学農科大学卒業）である。これまで演習林を担当する教員には、農科大学教授が担う演習林長を除き、付設林学科の助教授や、同等である本科の助手を配置し、主に付設の林学科や林学実科の卒業生を採用してきた。演習林への本科の助教授の配置は、これまでよりも高い職階にある教員が配置され、研究・教育体制が補強されたという点で、画期的であった。

前項でまとめた嘱託も含め、演習林の教員には卒業生が採用されるようになった。札幌農学校及び東北帝国大学農科大学における林学教育が本科・付設教育課程ともに充実し、林学士や林学得業士を送り出すことができるようになるにつれて、職員の学位も高くなることが見て取れる。

おわりに

札幌農学校に1901年に第一基本林が設置されてから、1907年から1918年にわたる東北帝国大学農科大学の期間を対象に、各林の概況及び教職員の配置をまとめた。基本林・演習林の運営は、当初は新島義直ら帝国大学（東京帝国大学）出身の教授が林長となり、嘱託や付設の林学科助教授の身分で、斎藤米蔵や板垣豊といった官林での実務経験者を配して行っていた。板垣は実務経験者であると同時に、札幌農学校森林科の卒業生でもあった。1909年からは、助手や嘱託として、付設実業教育課程を卒業してまもない林学得業士を配置するようになる。1909年は、既に1907年９月に本科の林学科設置が公布され、本科の林学科及び付設の林学実科が授業を開始する前年であった。さらに、本科の林学科から卒業生を送り出すようになると、林学士を取得した卒業生も助手や嘱託として加わるようになった。1915年には、新たに本科の助教授が演習林に配置され、画期をなしている。

各林の現地での管理は、札幌農学校期には、第二基本林では事業手が配置され、第一基本林と演習林では地元住民を看守として雇用していた。第一基本林・雨龍演習林に則していえば、看守が林内に詰めるようになったのは1909年の看守所建設後のことである。助手が各林に在勤するようになったのは、天塩演習林や苫小牧演習林が早く、1912年以前から在勤していた。他の各林は1914年前後からである。樺太演習林や朝鮮演習林、台湾演習林

は設置後まもなく助手が在勤したことになる。

助手がそれまでの１名から４名に増加した1914年を境に、演習林を担当する教職員は増加し、林学士である教員もみられるようになった。演習林における事業や実習、演習林での研究の進展や、東北帝国大学農科大学における林学教育の展開から、その背景を探る必要があろう。今後の課題としたい。

［注］

1）『北海道大学演習林60年の歩み』は、Ⅰ総説、Ⅱ本学演習林の概況、Ⅲ森林管理、Ⅳ施業計画、Ⅴ森林利用、Ⅵ造林、Ⅶ森林保護、Ⅷ林道及び防火線、Ⅸ林内植民、Ⅹ演習状況、Ⅺ試験研究、Ⅻ収支関係、の12項目で構成されている。

2） 帝国大学一般の附属演習林の財政的機能については島恭彦「帝国大学特別会計と演習林」（『経済論叢』第94巻第５号、1964年11月）に詳しい。

3） 北海道大学大学文書館所蔵。1909年発行分は、発行の事実も含め、未確認である。

4） 以上の資料を、本稿では『農場演習林植物園一覧』と略す。

5） 所在は設置当初の地名である。「地積」では、歩以下を切り捨て、１町を99.18a、１反を9.9173a、１畝を１a、１坪を0.033a として、ha に換算した。小数点以下は四捨五入した。

6）『北大百年史』通説、1982年、135ページ。

7）「札幌農学校庶務規程」（1899年３月改正）第一条、第二条（『札幌農学校一覧　自明治三十五年至明治三十六年』、1902年、81ページ）。

8）「札幌農学校庶務規程」（1899年３月改正）第五条（前掲『札幌農学校一覧　自明治三十五年至明治三十六年』、82–83ページ）。

9） 前掲『札幌農学校一覧　自明治三十五年至明治三十六年』所載「札幌農学校庶務規程」の改正年月は1899年３月となっているが、新たに農事部の職掌として「基本林ノ管理ニ関スル事項」が加わっている（83ページ）。同様に、「演習林ノ管理ニ関スル事項」も新たな改正年月の記載なく農事部の職掌として「庶務規程」に規定された（『札幌農学校一覧　自明治三十六年至明治三十七年』、1904年、69ページ）。

10） 以下、教職員の就職・異動・退職年は、『一覧』「職員」による。

11）「森林科規程」、『札幌農学校一覧　自明治三十二年至明治三十三年』、1900年、57–61ページ。

12） 以下、森林科、林学科、林学実科の変遷については、前掲『北大百年史』通説の「年表」に基づく。

13）「退職者履歴資料、二四、昭和18」（北海道大学大学文書館蔵）、31–55ページ。以下、新島の経歴は同資料による。

14）『東京帝国大学一覧　従明治四十年至明治四十一年』（1907年）所載の「学士及卒業者姓名」を参照した。

15）『札幌農学校一覧　自明治三十八年至明治三十九年』（1907年）所載「職員」欄に、「教授」として挙げられる教員16名のうち、「林学士」の称号を持つ教員は新島と宍戸の２名である。

16）「東北帝国大学農科大学官制」第八条「第一条職員ノ外植物園長、農場長及演習林長ヲ置キ教授又ハ助教授ヨリ文部大臣之ヲ補ス／植物園長、農場長及演習林長ハ学長ノ監督ヲ承ケ各其ノ事務ヲ掌理ス」（『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十年至明治四十一年』、1907年、９ページ）。

17）「退職者履歴資料九、大正15年」（北海道大学大学文書館蔵）、110–135ページ。以下、小出の経歴は同資料による。

18） 本科の林学科には、その後、1911年３月に森林利用学を専門とする第三講座、理水及び砂防工学を専門とする第四講座が、1912年には林政学及び森林管理学講座が増設された。

19）以上、学科の設置などについては、前掲『北大百年史』通説「年表」を参照した。
20）前掲『札幌農学校一覧　自明治三十五年至明治三十六年』、11ページ。「東北帝国大学農科大学官制」も同文である。
21）『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十三年至明治四十四年』1910年、109ページ。
22）「東北帝国大学農科大学官制」（1910年３月改正）（前掲『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十三年至明治四十四年』、9–10ページ）。
23）前掲『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十三年至明治四十四年』、102–103ページ。
24）「退職者履歴資料三、１、大正元～３」（北海道大学大学文書館蔵）、２ページ。
25）「退職者履歴資料二、３、明治40～41」（北海道大学大学文書館蔵）、412–415ページ。以下、小島の経歴は同資料による。
26）前掲「退職者履歴資料三、１、大正元～３」、７ページ。
27）「退職者履歴資料二、５、明治43」（北海道大学大学文書館蔵）、737–738ページ。以下、長岡の経歴は同資料による。
28）「退職者履歴資料二、４、明治42」（北海道大学大学文書館蔵）、548–550ページ。以下、大津の経歴は同資料による。
29）「雨龍演習林看守所位置及看守ニ付調査方復命書」、演習林文書1590「自明治三十九年度至大正十一年八月　演習林ノ沿革、統計並事業報告ニ関スル書類　第一類ノ七」（北海道大学大学文書館蔵）。
30）大津が転居を困難とした理由の一つに、親族の鷹泊郵便局長「吉田某」との関係から幌加内駅逓取扱人の業務や「吉田某」所有の農場監督を引き受けていることを挙げている。大津の親族「吉田某」は、北村を推薦した「吉田郵便局長」と同一人物と推測される。
31）前掲「退職者履歴資料二、４、明治42」、456–466ページ。以下、斎藤の経歴に関しては同資料による。
32）御料局札幌支庁は、皇室財産として宮内庁にひきわたされた北海道内の山林を管理していた（北海道編・発行『北海道山林史』、1953年、51–55ページ）。
33）「退職者履歴資料二、７、明治45」（北海道大学大学文書館蔵）、915–918ページ。以下、板垣の経歴は同資料による。

［後記］
執筆にあたり、北海道大学名誉教授　逸見勝亮先生にご指導をいただきました。記して感謝申し上げます。

（ささき　ともこ／北海道大学大学文書館員）

付表　札幌農学校及び東北帝国大学農科大学演習林担当教職員一覧

年月	職名	所属林	氏名	身分	学位（出身校）	備考
札幌農学校（1876～1907年）						
1900. 11.	（演習林担当教職員記載なし）					
1902. 12.	基本林長	第一基本林	新島善直	教授	林学士（東京帝大）	森林科主任 農事部員
	基本林長	第二基本林	新島善直	教授	林学士（東京帝大）	森林科主任 農事部員
	嘱託監督	第一基本林	斎藤米蔵	嘱託監督		
	嘱託監督	第二基本林	斎藤米蔵	嘱託監督		
	事業手	第二基本林	小島蔵之丞	事業手		
1903. 11.	基本林長	第一基本林	新島善直	教授	林学士（東京帝大）	森林科主任
	基本林長	第二基本林	新島善直	教授	林学士（東京帝大）	森林科主任
	演習林長	演習林	新島善直	教授	林学士（東京帝大）	森林科主任
	嘱託監督	第一基本林	斎藤米蔵	嘱託監督		授業嘱託教員（独乙語）
	嘱託監督	第二基本林	斎藤米蔵	嘱託監督		授業嘱託教員（独乙語）
	事業手	第二基本林	小島蔵之丞	事業手		
1904. 10.	基本林長	第一基本林	新島善直	教授	林学士（東京帝大）	森林科主任
	基本林長	第二基本林	新島善直	教授	林学士（東京帝大）	森林科主任
	演習林長	演習林	新島善直	教授	林学士（東京帝大）	森林科主任
	嘱託監督	第一基本林	斎藤米蔵	嘱託監督		嘱託教員（独乙語）
	嘱託監督	第二基本林	斎藤米蔵	嘱託監督		嘱託教員（独乙語）
	事業手	第二基本林	小島蔵之丞	事業手		
	看守	演習林	長岡浅吉	看守		
1905. 12.	基本林長	第一基本林	宍戸乙熊	教授	林学士（東京帝大）	林学科主任
	基本林長	第二基本林	宍戸乙熊	教授	林学士（東京帝大）	林学科主任
	演習林長	演習林	宍戸乙熊	教授	林学士（東京帝大）	林学科主任
	嘱託監督	第一基本林	斎藤米蔵	嘱託監督		嘱託教員（独逸語）
	嘱託監督	第二基本林	斎藤米蔵	嘱託監督		嘱託教員（独逸語）
	事業手	第二基本林	小島蔵之丞	事業手		
	看守	第一基本林	大津鄰	看守		
	看守	演習林	長岡浅吉	看守		
1907. 1.	基本林長	第一基本林	宍戸乙熊	教授	林学士（東京帝大）	林学科主任
	基本林長	第二基本林	宍戸乙熊	教授	林学士（東京帝大）	林学科主任

年月	職名	所属林	氏名	身分	学位（出身校）	備考
	演習林長	演習林	宍戸乙熊	教授	林学士（東京帝大）	林学科主任
	嘱託監督	第一基本林	斎藤米蔵	嘱託監督		講師（独逸語）
	嘱託監督	第二基本林	斎藤米蔵	嘱託監督		講師（独逸語）
	雇	第二基本林	小島蔵之丞	雇		
	看守	第一基本林	大津鄰	看守		
	看守	演習林	長岡浅吉	看守		
東北帝国大学農科大学（1907～1918年）						
1907.10.	演習林長	演習林	宍戸乙熊	農科大学助教授	林学士（東京帝大）	林学科教授 林学科主任心得
	嘱託	演習林	斎藤米蔵	嘱託員（演習林事業監督）		講師（独逸語）
	嘱託	演習林	柴田春造	嘱託員（農場事業監督補助）		農場嘱託 植物園嘱託 後備陸軍歩兵軍曹
	雇	演習林	小島蔵之丞	雇		
	看守	雨龍演習林	大津鄰	看守		
	看守	天塩演習林	菅野利兵衛	看守		
	看守	苫小牧演習林	長岡浅吉	看守		
1908.11.	演習林長	演習林	宍戸乙熊	農科大学助教授	林学士（東京帝大）	林学科教授
	助教授	演習林	板垣豊	林学科助教授	（札農森林科）	
	嘱託	演習林	柴田春造	嘱託員（農場事業監督補助）		農場嘱託 植物園嘱託 後備陸軍歩兵軍曹
	事業手	演習林	小畑善三	事業手		
	看守	雨龍演習林	大津鄰	看守		
	看守	苫小牧演習林	長岡浅吉	看守		
1909.11.	演習林長	演習林	小出房吉	農科大学教授	林学士（東京帝大）、林学博士	林学科教授 林学科主任
	助教授	演習林	板垣豊	林学科助教授	（札農森林科）	
	嘱託	演習林	柴田春造	嘱託員（農場事業監督補助）		農場嘱託 植物園嘱託
	嘱託	演習林	岩崎直人	嘱託員（演習林事業取扱）	林学得業士（東北帝大林学科）	
	事業手	演習林	小畑善三	事業手		
	看守	雨龍演習林	北村袈四郎	看守		
	看守	苫小牧演習林	長岡浅吉	看守		
1910.11.	演習林長	演習林	小出房吉	農科大学教授	林学士（東京帝大）、林学博士	林学第一講座担任 林学講堂主任 林学実科主任
	助手	演習林	谷本勇造	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学科）	
	書記	演習林	柴田春造	農科大学書記		農場書記 植物園書記
	嘱託	演習林	谷村進	嘱託員（演習林事業取扱）	林学得業士（東北帝大林学科）	
	事業手	演習林	小畑善三	事業手		

年月	職名	所属林	氏名	身分	学位（出身校）	備考
	看守	雨龍演習林	北村袈四郎	看守		
	看守	苫小牧演習林	長岡浅吉	看守		
1911.7.	演習林長	演習林	小出房吉	農科大学教授	林学士（東京帝大）、林学博士	林学第一講座担任 林学講堂主任 林学実科主任
	助手	演習林	谷本勇造	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学科）	
	書記	演習林	柴田春造	農科大学書記		農場書記 植物園書記
	嘱託	演習林	森岡勇	嘱託員（林産製造調査）	農学士（東北帝大）	
1912.10.	演習林長	演習林	小出房吉	農科大学教授	林学士（東京帝大）、林学博士	林学第一講座担任 林学講堂主任 林学実科主任
	助手	演習林	谷本勇造	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学科）	
	書記	演習林	柴田春造	農科大学書記		農場書記 植物園書記
	嘱託	演習林	小野崎浩三	嘱託員（演習林事業取扱）	林学得業士（東北帝大林学科）	
1913.11.	演習林長	演習林	小出房吉	農科大学教授	林学士（東京帝大）、林学博士	林学第一講座担任 林学講堂主任 林学実科主任
	助手	演習林	谷本勇造	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学科）	
	書記	演習林	鴨沢恒義	農科大学書記		農場書記 植物園書記
	嘱託	演習林	小野崎浩三	嘱託員（演習林事業取扱）	林学得業士（東北帝大林学科）	
1914.11.	演習林長	演習林	小出房吉	農科大学教授	林学士（東京帝大）、林学博士	林学第一講座担任 林学講堂主任 林学実科主任
	助手	演習林	谷本勇造	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学科）	
	助手	演習林	岩崎直人	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学科）	
	助手	演習林	小野崎浩三	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学科）	
	助手	演習林	勝野正雄	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学実科）	
	書記	演習林	鴨沢恒義	農科大学書記		農場書記 植物園書記
1915.11.	演習林長	演習林	小出房吉	農科大学教授	林学士（東京帝大）、林学博士	林学第一講座担任 林学講堂主任 林学実科主任
	助教授	演習林	中島広吉	農科大学助教授	林学士（東北帝大）	

年月	職名	所属林	氏名	身分	学位（出身校）	備考
	助手	演習林	和田周造	農科大学助手	林学得業士（札農林学科）	
	助手	演習林	谷本勇造	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学科）	
	助手	演習林	岩崎直人	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学科）	
	助手	演習林	佐藤義夫	農科大学助手	林学士（東北帝大）	
	助手	演習林	小野崎浩三	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学科）	
	書記	演習林	鴨沢恒義	農科大学書記		農場書記 植物園書記
	嘱託	演習林	成田則淑	嘱託員（演習林事業取扱）	林学得業士（東北帝大林学実科）	
	嘱託	演習林	米屋広吉	嘱託員（演習林事業取扱）	林学得業士（東北帝大林学実科）	
1916.11.	演習林長	演習林	小出房吉	農科大学教授	林学士（東京帝大）、林学博士	林学第一講座担任 林学講堂主任 林学実科主任
	助教授	演習林事務所	中島広吉	農科大学助教授	林学士（東北帝大）	
	助手	演習林事務所	和田周造	農科大学助手	林学得業士（札農林学科）	
	助手	苫小牧演習林	谷本勇造	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学科）	
	助手	朝鮮演習林	岩崎直人	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学科）	
	助手	演習林事務所	佐藤義夫	農科大学助手	林学士（東北帝大）	
	助手	天塩第一演習林	小野崎浩三	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学科）	
	書記	演習林事務所	鴨沢恒義	農科大学書記		農場書記 植物園書記
	嘱託	天塩第二演習林	成田則淑	嘱託員（演習林事業取扱）	林学得業士（東北帝大林学実科）	
	嘱託	雨龍演習林	米屋広吉	嘱託員（演習林事業取扱）	林学得業士（東北帝大林学実科）	
	嘱託	演習林事務所	石尾和作	嘱託員（演習林事業取扱）	林学士（東北帝大）	
1917.11.	演習林長	演習林	小出房吉	農科大学教授	林学士（東京帝大）、林学博士	林学第一講座担任 林学講堂主任 林学実科主任
	助教授	演習林事務所	中島広吉	農科大学助教授	林学士（東北帝大）	
	助手	演習林事務所	和田周造	農科大学助手	林学得業士（札農林学科）	
	助手	苫小牧演習林	谷本勇造	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学科）	

年月	職名	所属林	氏名	身分	学位（出身校）	備考
	助手	演習林事務所	佐藤義夫	農科大学助手	林学士（東北帝大）	
	助手	朝鮮演習林	岩崎直人	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学科）	
	助手	天塩第一演習林	小野崎浩三	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学科）	
	助手	天塩第二演習林	成田則淑	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学実科）	
	助手	雨龍演習林	竹山賢一	農科大学助手	林学得業士（東北帝大林学実科）	
	書記	演習林事務所	鴨沢恒義	農科大学書記		農場書記 植物園書記
	書記	雨龍演習林	小畑善三	農科大学書記		
	嘱託	演習林事務所	石尾和作	嘱託員（演習林事業取扱）	林学士（東北帝大）	
	嘱託	台湾演習林	籠田又平	嘱託員（演習林事業取扱）	林学得業士（東北帝大林学実科）	

出典：第一基本林設置（1901年）以降に発行された『札幌農学校一覧』及び『東北帝国大学農科大学一覧』（以下、両者を『一覧』と略す）所載の「職員」、また、『東京帝国大学一覧 従明治四十年至明治四十一年』（1907年）所載の「学士及卒業者姓名」及び『北海道帝国大学一覧 自大正七年至大正八年』（1918年）所載の「卒業生」を参照した。

注：1）「年月」欄には、各『一覧』所載の「職員」に記載された現在年月を示した。
2）「所属林」欄の記載「演習林」は、札幌農学校期では1904年設置の「演習林」に所属することを指し、東北帝国大学農科大学期では特定の演習林に所属しないことを示す。
3）「氏名」欄では、『一覧』記載の旧字を新字に改めた。
4）「学位（出身校）」欄では、帝国大学農科大学及び東京帝国大学農科大学を「東京帝大」、札幌農学校を「札農」、東北帝国大学農科大学を「東北帝大」と略した。
5）「備考」欄には、『一覧』に記載された学内の兼務、また軍属を示した。
6）『一覧』所載の「職員」では、1911年以降、官制外の職員（看守、雇、事業手）の記載が見られない。掲載方針の変更によると推察される。